

『基督教聖歌集』考

——松本栄子の事績を中心にして——

邪宗門禁制の高札が撤去された翌年の明治七年に、横浜・神戸・長崎の三港市を中心として、七種類の讚美歌集が作られた。高札は外されても、なおキリスト教が公認されていなかった折のこととて、それらは開港場の外人居留地内に設けられた教会中心に編まれたものだった。ちなみに、信教の自由が曲がりなりにも認められるようになるのは、同二十二年に発布された大日本帝国憲法においてである。

その七点の出自は、組合教会系が三点、一致教会（のちの日本基督教会）系が二点、メソジスト教会系、バプテスト教会系がそれぞれ一点ずつ。所収歌数もさまざまで、八篇から三十九篇までの開きがあり、すべて百五十五篇に及ぶけれども、その中には共通・同種のものも少なくない。また、判型もまちまちとはいえ、概して小ぶり、木版本が五点、ほかに活字本、写本がそれぞれ一点ずつある。

その後、明治二十一年に画期的な合同歌集として『新撰讚美歌』が編まれ、次いで同二十三年に譜付きの一段と完備したその改訂版が刊行されるまで、主として教派別の聖歌集が、すべて四十五点ほど作られる。その間、各教派はめまぐるしい離合集散を繰り返す。まず、プ

ロテスタント一般が、自由民権運動と同盟を結んで闘った明治十年代半ばごろまでは、一致団結する必要に迫られて合同の気運の盛り上りを見せるのだが、ついにそれは実現せず、自由民権運動の挫折、さらに鹿鳴館時代、憲法発布と、見せかけの近代化が進行する過程で、各教派は激しく競合し、分裂はもはや避けられなくなる。

『新撰讚美歌』の成った明治二十一年は、すなわち憲法発布の前年で、教界の二大勢力たる一致教会派（長老教会派と改革教会派の合体したもの）と組合教会派との握手は、いま一步のところて実現しなかったものの、副産物として両派共編のこの歌集が生まれたのである。所収二百六十三篇。それまでの試作期の全成果に目配りしているのは、これは事実上の合同歌集と称するに足りるものであり、また現行の『讚美歌』（昭和二十九年）の基礎ともなるものであった。本書に關与したひとは多いが、主として実務に携わったのは、一致教会派の奥野昌綱、植村正久、組合教会派の松山高吉（たかよし）、G・オルチン（音楽担当）の四者である。

ところで、そうした『新撰讚美歌』の出現に先立って、前述したよ

鈴木 亨

うに四十五点に及ぶ諸歌集が作られているわけである。その試作期の様相を、次に探ってみよう。——この四十五点という数字は、海老沢有道著『日本の讚美歌』（昭和二十二年）の記述によるものであるが、その第四十五番目の『Gospel Hymns』は、英語の福音讚美歌四百一十六篇を収録したもので除外し、他の四十四点をここでは対象とする。

それら四十四点を教派別にみると、組合教会派十四点、メソジスト教会派・聖公会派がともに九点、バプテスト教会派六点、一致教会派五点で、別に教派不明のものが一点ある。そして、それらに収録されている歌数には、八篇から二百四十七篇までの開きがあつて多様だが、合計すると三千九百六十五篇に達し、その平均は約九十篇ということになる。

最高の二百四十七篇が収録されているのは、明治十七年に刊行されたメソジスト教会派の譜付き『基督教聖歌集』で、この歌集は前述した同二十一年版『新撰讚美歌』の二百六十三篇に匹敵する。試行期の四十四点中、これに次ぐ歌数を有するのは『聖公会歌集』（同十六年）で、所収百四十五篇だから、それをも遙かに上回る。

わたしは以下、初期讚美歌集中、そうした偉容を誇る『基督教聖歌集』について、いささか考察してみたい。

実はその明治十七年版『基督教聖歌集』の原物を、わたしはまだ入手していない。しかし最近、尾崎安編『讚美歌集』（近代日本キリスト教文学全集15、昭和五十七年）に、その全内容が紹介され、それに依つて考察をすすめることができるようになったのは、幸いである。ただ同書には、書誌的な記述がまったくと云つていいほどされていないの

で、書誌をめぐる解明は、諸参考資料に当たりながらしていくほかにいい。

『基督教聖歌集』は明治十七年、横浜の美以美雜書会社（「美以美」は Methodist Episcopal Mission のイニシャル）から刊行された。刊行の月日は記載されていないので、未詳。編者はメソジスト教会派の宣教師、J・C・デビソンである。海老沢有道著『日本の讚美歌』（前出）には、「讚詠三を含み二百四十七篇の他頌栄十。頌栄を除き全部に本譜がほどこされて」いる。「四角に譜付珍袖とある洋綴本。デヴィスン主任となり、アメルマン J. L. Amerman、岩野泡鳴、永井（松本）栄子らが助手として編纂」とある。この譜付き讚美歌の前身は、同じくデビソンの編んだ『讚美歌一』（明治十年）で、ほかにこれ以前に作られた譜付きのものとしては、バプテスト教会派の『宇太登不止』（同九年）、組合教会派の『讚美歌並楽譜』（同十五年）などがある。

編者のデビソンは、明治六年に来朝している。そもそも、アメリカ人宣教師の来朝は、日米修好通商条約が締結された翌年の安政六年（一八五九）夏に、聖公会派の C・M・ウィリアムズが長崎に上陸したのが嚆矢で、次いで長老教会派の J・C・ヘボン、改革教会派の S・R・ブラウン、D・B・シモンズ、G・F・フルベッキらが、その年のうちにやってくる。以来、明治維新までの間に、バプテスト教会派の J・ゴープル、改革教会派の J・H・バラ、長老教会派の D・T・タムソンらが来日した。

メソジスト教会派のそれは、もつとも遅れ、明治六年（一八七三）に至つて初めて、G・コ克蘭、D・マクドナルド、さらに R・S・マクレイ、I・H・コレル、J・C・デビソン、J・ソーパー、M・C・ハリスらが、相次いで到来した。かれらは伝道地の中心を東京・横浜・

函館・長崎の四か所と定め、デビソンは長崎連回（連回は District の訳語で、メソジスト教会の分割行政区のこと）の長老司（連回の統轄者）として、長崎に派遣されることになった。

それから約十年間、デビソンは長崎にあって同市最初のメソジスト教会（出島、のち長崎銀座町教会）を創立し、また活水学院、鎮西学院の設立に尽力する一方、讚美歌集の製作も手がけた。明治七年に出た七点中の一つ、『讚美のうた』がその第一作で、かれはこれをやはり長崎にあった改革教会派の H・スタウトと協力して編む。その際、それぞれの日本語教師、飛鳥賢治郎、瀬川浅が助手を務めたという。木版縦本で、歌数は二十三篇。中にデビソンの創作歌が四篇、含まれている。

第二作は、先述した譜付きの『讚美歌一』（明治十年）である。これは前著と違い、デビソンが単独で編んだもので、『日本の讚美歌』（前出）に、「長崎出版の横本。収むる所五十一篇に四篇の頌榮。注目すべきは本譜が七曲あり、本譜使用最初のものとして特筆大書する価値がある。上海から譜字を買つて来て一々捺したものだからである。又歌詞も著しくととのへられて見るべきものが多くなつてゐる」とある。

「収むる所五十一篇」は、「五十三篇」の誤り。前著『讚美の歌』所収の二十三篇中、十八篇が改修の上、再録されているので、新収録の歌は三十五篇ということになる。また、「本譜使用の最初のもの」とは、先行の『宇太登不止』（明治九年）の譜が、ソルファ略譜であったことに基づく記述である。

なお、覆刻版『明治初期讚美歌』（新教出版社、昭和五十三年）の「解説」によれば、日本人の助手は不明であるが、『讚美のうた』の場合と同じく、「飛鳥賢治郎であったかも知れない」という。このひとは

もと禅僧だったけれども、デビソンの日本語教師となって棄教し、その最初の洗礼を受けている。説教に長じ、鹿児島・熊本・福岡地方の伝道に尽くした篤信家である。また同「解説」は、巻末に添えられた七曲の楽譜について、「最少限、これだけの曲がうたえれば、大部分の讚美歌が一応うたえるように考慮したあとが見られる」とする。

この『讚美歌一』における楽譜記載の体裁について、ひとこと私見を差し挟んでおこう。どうやらそれは、のちの文部省版『小学唱歌集』三巻（明治十四～十七年）にそっくり流用されている、と思われるのである。

やがて明治十六年、メソジスト教会は讚美歌委員を作り、いよいよ本格的な聖歌集の製作に乗り出す。そして、デビソンはその一人に選ばれ、住み馴れた長崎を離れて横浜に着任する。明治六年に夫人を伴って横浜に上陸し、初めて日本の土を踏んだかれは、直ちに長崎連回の長老司の任を帯びて西下した。以来十年ぶりに、横浜に舞い戻ったわけで、このときかれはむろん長崎での長老司の任は解かれていたであらう。

委員と称する以上、委員会があり、デビソンのほかにも何人かの委員がいたはずなのに、その辺の事情はまるでわからない。ただ、わかっているのは、かれが独力で一切をとりしきっていったとみられることである。いずれにしろ、この委員会の設置は、メソジスト教会の教勢の伸展に伴って聖歌集の整備が急務とされたからのことであらう。のみならず、そこには明治十三年に一致教会が讚美歌委員を作り、翌十四年に『讚美歌』（木版本、歌数百三）をまとめていることによる刺戟が介在したとも思われる。

そうした情勢下にデビソンは、さっそく明治十六年から十七年にかけて、新しい歌集の編纂に精力的に取り組んだ。従来の経過からいえば、これは『讚美歌一』（明治十年）に次ぐ第二集に当たるはずのものながら、歌数はみるみる五倍にもふくらみ、スタイルも木版から活版に改まる。楽譜の銅版は、長崎在任中に休暇を得て帰米した際、他日を期し、私財を投じて現地で製作しておいたものという。かくて、めざましい大冊の『基督教聖歌集』が成った。

その着手に当たって、デビソンは日本人の助手の斡旋方を津田仙に依頼している。仙は例の最初の女子留学生五人中に加わり、さらにクリスチャンカレッジの女子英学塾（のち津田英学塾、現・津田塾大学）を創立したことで知られる津田梅子の、厳父である。東京連回における最初の受洗者で、明治九年に学農社農学校を創立し、海外農業の導入と、キリスト教精神による教育に成果をあげていた。かれは東京築地の明石町にあった、海岸女学校の生徒を推薦する。その名は、松本栄子。当年十八歳（満十七歳）であった。仙は梅子を八歳で留学生にしている。そんなかれにして、初めて可能な思いきった人選といえよう。

そのころメソジスト教会が東京に持っていた学校としては、築地女学校のほかにもう一つ、男子校の東京英学校（銀座）があった。この両校が合流して、のちに青山学院となるわけである。津田仙はみずから農学社農学校を主宰していたが、この両校の創立・運営にも深く肩入れしていて、松本栄子の英才ぶりについても早くから関知していたのだった。

栄子の出自は、千葉県君津郡馬来田（現、木更津市茅野）の農家である。家業は農業でも、父は和漢の学を修め、家塾を開いていたというような知識人であった。その後妻の子として、栄子は慶応二年（一八六六）

に生まれた。先妻との間にも一女があったものの、中年を過ぎて設けた栄子に父は特に眼を注ぎ、幼時から男子並みに扱って極端な英才教育を施す。そうして彼女を、文明開化の世に羽ばたかせようとしたのであろう。

明治五年（一八七二）に学制が發布されると、父は家塾を畳み、そのあとしばらく一家は東京麻布の津田仙方に身を寄せる。それはたぶん、仙が千葉集佐倉の出身だったという地縁からのことであろう。同七年、メソジスト教会の女子小学校が津田家の隣りに開設されると、栄子はそのに通うようになったらしい。同校は築地女学校のそもその前身で、米国メソジスト教会婦人外国伝道局から派遣された若い婦人宣教師、ミスD・E・スクーンメーカーが創立したものの。仙が隣りの広い屋敷の幾間かを借り受け、その校舎として提供していたのである。

（この明治七年に、梅子が留学生となって渡米した。なお、青山学院はこの女子小学校開設の年をもって、創業の年としている。）

女子小学校は、次いで救世学校と名乗り、明治十年に海岸女学校となる。栄子はそのすべてに通い、デビソンと呼ばれた同十六年には、海岸女学校は七、八十名を擁していて、彼女は四、五年生ほどであったと思われる。

栄子は横浜のデビソンのもとで、立派に任務を果たすのだが、ここで少々先回りして、そのあとの経歴をざっと追っておく。彼女はそれから約十年後の明治二十八年に、『基督教聖歌集』の改正増補版が作られる際にも、デビソンを助けて縦横に働いた。その時分にはすでに結婚していたが、やがて離婚すると、程もなく同三十五年（三十七歳）に、單身渡米した。

アメリカでは、ニューヨーク保険会社の個人代理店を開いていた日

本人（永井元）と再婚し、主としてその仕事の手伝いに明け暮れる日常だったようだ。そして、彼女は絶えて帰国することもなく、昭和三年にサンフランシスコで客死する。享年六十四歳。没後、夫君の手で短歌・エッセイを中心とする千三百余頁の、浩瀚な遺稿集『永井ゑい子詩文』（非売品、昭和四年）が編まれた。

その遺稿集は、松本栄子のみならず、『基督教聖歌集』をさぐるためにも不可欠の文献である。わたしのこの小考もすでに多く同書に負っているが、以下の記述においてもいっそう恩恵を蒙ることになるはずである。

横浜に移ったデビソンは、山手の外人居留地の西端、二二一番（現、中区山手町）に住むことになった。そこは中村川にかかる車橋を渡って、いまの石川町五丁目を南進する牛坂を登りつめたところで、道を隔てた筋向かいの二二二番には、横浜共立学園がある。同校はアメリカの超教派的な婦人一致外国伝道協会が、明治五年にそこに創立した学校で、初めは日本婦女英学校と呼ばれ、同八年に共立女学校と改称された。学園というようになるのは、今次戦後の昭和二十二年からのことである。

デビソンの住んだ二二一番には、天安堂と称する教会堂と、聖經女学校（聖經は聖なる經典、つまり聖書のこと）という女学校の校舎とが並んでたっていた。天安堂は明治九年の設立で、新教の最古の教会堂の一つ。その規模は、当時としては最大のものであったと思われる。また聖經女学校の創立は明治十七年九月で、それまで、そこには美以神学校があった。それは天安堂付属の神学校で、明治十二年に開校している。そして、この礼拝堂と学校の両施設は、メソジスト教会派の本

部になっていたのであるが、同十五年、本部が東京に進出するに及んで、神学校も東京に移転し、先述した銀座の東京英学校と合体して、東京英和学校と改称する。聖經女学校はそのあとを襲ったもので、女学校とはいっても、内実は女子神学校ともいえるべき、婦人伝道師養成機関であった。

美以神学校は三十名程度の学生を擁していたらしいが、聖經女学校は六名の学生でスタートしたという。校舎は神学校以来のものらしく、当時の写真をみると、ひどく宏壮な二階建の洋館であり、付設の建物も若干みられる。たぶんそこには、教室・寄宿舎、さらに教師の住居まで含まれていたであろう。文献の中には、その敷地を隣りの二二二番とするものもあるもので、あるいは天安堂・聖經女学校の両施設の敷地は、二二二・二二二番の双方にまたがっていたのかもしれない。

共立女学校は名称こそ変っても、同じ場所に健在だが、この両施設は、いまは跡形もない。しかし、おもしろいことに旧山手居留地の一番の数字は、現在もすべて当初のままなので、その場所や広さは容易に察知し得る。二つの地番を合わせた面積は、一〇〇〇坪（三三〇〇平方メートル）ほどであろうか。とにかく、デビソンはその中に住むことになり、やがてうら若い松本栄子をそこに招いて、仕事を開始する。つまり、そこは讚美歌編纂所になったわけである。

その際の状況を、当のデビソンに語ってもらおう。この談話は、栄子の遺稿集『永井ゑい子詩文』（前出）中にみられるものである。同書は昭和三年四月二十三日、彼女が卵巣癌のためにサンフランシスコにおいて、六十四歳で客死した直後から三か月ほどの間に、夫君の永井元が知友の海老名一雄の協力を得て現地を編んだもの。両者はその折、たまたまデビソンが目と鼻の先のパークレーに隠棲していることを知

って訪問し、聞き書きをとっている。

デビソンは大正十年に引退して、日本を離れ、以来その地であった。時に八十六歳。昭和三年八月五日、かれはふたりを自邸に迎えて「歛談数刻、四十年若くは三十年前の往事を追想し、説き語るところ極めて詳細、聴者をしてさながらその現場にあるの感をなさしめた」（海老名一雄「多い子女史と日本の讃美歌」、『永井多い子詩文』）。デビソンは「札幌のクラーク、熊本のジューンズと等しく南北戦争の勇士であり、その「風貌には、何処とも知れず古武士の潑瀟たる面影が偲ばれ」（同前）たという。「四十年若くは三十年前の往事」とは、いうまでもなく四十一、二歳のデビソンが、十八、九歳の栄子といっしょに『基督教聖歌集』を編み、また十年後に再び協力してその改正増補版を作ったときのこと。

次は海老名の伝える、その際の聞き書きの一部である。

「お多いさんを見出したことは私にとつて何よりの幸福でした。

私はお多いさんの名をずつと前から聞いてみました。お多いさんといふ珍しい神童があるといふことは私が日本へ来ると間もなく津田仙さんから聞いたのです。然し、このお多いさんが私と一所に讃美歌の仕事をしてくれようとは夢にも想はなかつた。夫れまで私を援けてくれた日本人とは違ひ、お多いさんには立派に英語が読めた。日本文学の素養も申分なかつた。お多いさんは毎日のやうに私の所に来て、私と椅子を並べて仕事をした。一句一句誦しながら日本語の歌詞を練り、考へに考へて纏まつたものが出来る上ると、夫れを更にお多いさんが手を入れて美しい日本語とし、又私は夫れを唱つて見ては語調の改むべきところを改めた。これは明治十六年から十七年の間のことで、場所は横浜でした。お多い

いさんは前後十ヶ月以上私と一所に働いてくれたでせう。実に才気煥発、見るからに快よい娘さんでした」

ここに「前後十ヶ月以上」とあるが、その点に関して同じく遺稿集にある永井元の文章（『日本時代の多い子』）中の聞き書きは、

「基督教聖歌集の翻訳に従事し完了するまでには一八八三年から翌一八八四年（明治十七年）にかけて凡そ十ヶ月かかりました。但し私は日記をつけて置きませんから何月から何月までと云ふことは確かに分りません」

と伝えている。これも期間は「凡そ十ヶ月」としているが、それがいつからいつまでだったかはつきりしないという。当事者が不明とあつては、取り付く島もないものの、わたしはそれは明治十六年九月以降の、約十か月ではなかつたかと思う。当時の諸学校の新年度は、九月からであった。明治十三年に定められた東京英学校の「教則」の中にも、「一年ヲ分チ三学期トス、第一期ハ九月上旬ヨリ十二月下旬ニ至リ、第二期は一月上旬ヨリ四月中旬ニ至リ、第三期は四月下旬ヨリ七月下旬ニ至ル」（青山学院編『青山学院九十年の歩み』昭和三十九年）とある。海岸女学校でも事情は変わるまい。つまり、栄子は一学年間、デビソンのもとに派遣されていたのではないか。明治十六年九月上旬から、翌十七年の七月下旬までは、十一か月である。

『基督教聖歌集』は、刊行の月日を欠いている。それにしても、譜付きの厄介な活版印刷を明治十七年中に終えるためには、どのみち夏までには原稿を仕上げおく必要があつたであろう。ここで注目されるのは、その年の八月にデビソンが横浜連回の長老司に任命されていることである。『日本メソヂスト横浜教会六十年史』（昭和十二年）によると、八月下旬に東京築地明石町の十一番館で開かれた明治十七年

度日本メソジスト年会において、「マクレレー博士は東京英和学校長に、コレル師は横浜北部連回地（神奈川、松本、松代、飯田、高遠）長老司に、J・C・デビソン氏は横浜南部連回地（横浜・名古屋・西尾・豊橋）長老司」に、それぞれ当てられた。とすれば、デビソンはその時にはすでに編纂を果たしていたのであろう。この事実は、その下限を同年七月とするわたしの推測を裏づけてくれると思う。

そうした十か月ほどの間、栄子には両親が付き添っていた。永井元は前掲の聞き書きにつづけて、その様子を次のようにしている。

多い子が横浜に滞在中は、千葉から父母も尋ねて来て起居を共にして居たらしい。其時の写真を見ると、父母も共に元氣旺盛の様が見える。両親が椅子にキチント腰かけて居る後ろに多い子は立つて居るが、縞子らしい半襟のついた腰揚げのある着物に、無地の羽織を着、襦袢のゑりは咽喉の処で堅く合せ、極めてデミナ風体である。今見て珍らしく感ぜられるのは前髪を高く取つた日本髪に花簪はなかんざしを挿して居ることである。

かかる親子が、聖經女学校の一隅で暮らしていたのであろうか。ただ、いかに進取の気性に富んでいたとはいえ、農村生活の染みついた両親にとつて、さすがにそれは気づまりだったとも思えるので、かれらは近くの民家にも仮寓し、そこから栄子がせつせとデビソンのもとに通つたとみる方が、自然かもしれない。

『基督教聖歌集』を編んだあと、明治十七年八月に横浜連回の長老司になったデビソンは、在任一か年、翌十八年九月にはその役をコレルにゆずり、再び長崎連回の長老司として働く。やがて明治二十五年に同書の改正委員会が組織されると、また起用され、こんどは東京に

着任した。その際の助手も栄子だったが、彼女はすでに結婚していて、姓が松本から家永に変わっていた。そして同じようにデビソン・栄子のコンビが中心になって、仕事が進められ、十七年版の前著の歌の倍近い、四百二十五篇を収める大歌集が二十八年に出現した。こんどのものも、むろん譜付きの活版である。連中の仕事場は明らかでないけれども、築地女学校か、二十二年に青山に移転していた東京英和学校（二十七年に青山学院と改称）のどちらかが、それに当てられていたかもしれない。

この時の様子も、デビソンに語ってもらおう。これは海老名一雄「多い子女史と日本の讚美歌」（前出）所収の、デビソンの書簡の一節である。

「当時彼女は病体であつた。然し改訂本の歌詞全部を校閲してこれに修正を加へた。委員は大勢あつたが、実際の仕事は殆どすべてお多いさんと私とがした。そして他の委員に対しては私共のやつた仕事を見せてただ賛成を求むるに過ぎなかつた」

この改訂の折の稿本を、デビソンは保管していた。それを示された海老名は、同じ文章の中で次のような所見をしるしている。

現存せる稿本の頁を繰つて見る時、どの頁として朱筆の入つてゐないものは殆んどないと云つてよい。中には全頁が皆朱になつて居るものもあれば、或は別に歌詞を認めた紙を貼付したものもある。そして其殆ど九分九厘が明らかに女史の筆跡である。デビソン師によれば是等の外に尚百首以上女史の手によつて翻訳又は創作されたものが改訂本に収められてあるといふ。これに依つて見れば明治廿八年版の『基督教聖歌集』の中で女史の息のかゝつてゐないものは殆んどないと云つてよいのである。

如上の経緯は、「明治二十八年六月」の日付と「讚美歌改正委員」の署名を持つ同書の序においても、詳述されているので、いささか長くなるけれども、その前半を引用しておく。

明治廿五年七月十四日より同廿一日に至る迄東京に於てメソジスト監督教会年會々議の開られし際ジェーシーデビソン、小方仙之助、山田寅之助の三名我教会讚美歌即ち明治十七年ジェーシーデビソン氏の編纂せし「基督教聖歌集」の改正委員に撰ばれたり之を改正するに付ては歌譜共に従来のものより一層多様ならしめんと欲し更らにこれを増補せり委員等は各々自己の職務を有するに付互に相會合するの便を得ざりしが為め日本人委員が改正を負担し外国人委員之が増補を担当し各自その分担する所を交換調査することとなしたりき

翻訳者として家永夫人えい子女史の補助を得しは委員等の甚だ幸とする所女史は十七年の出版にも大にちからを添へられしが此度も亦デビソン氏と協力して日本人委員の訂正せし所を再閲し尚新に百首翻訳し偶々その病氣の爲め中途にして之を辞せられしは委員等の遺憾とする所爰に女史が勞を記して聊か感謝の意を表す他にまた之と等しき補助を得て三十六首を訳せり之に加ふるに種々の人々の自作四十首と他教会讚美歌より許可を得て其儘借来りしもの八首都合四百二十五首となれり

これによれば、改正委員はデビソン、小方仙之助、山田寅之助の三名であったことが知られる。当時、小方は東京英和学校校長、山田は同校神学部の教授であった。一方、デビソンはそうした兼務をもたず、この仕事に専念できる立場にあったのであろうか。なお、助手の榮子はここでも溢美の頌辭を得ている。彼女が「病氣の爲め中途にして之

を辭」した、とあるのは、彼女が明治二十八年三月に出産しているで、妊娠を言ったものと思われる。——こうして、デビソン・榮子を中心とする仕事は、こんどは約二年がかりで実を結び、二十八年七月に東京のメソジスト出版舎（現、教文館）から、空前の大歌集が刊行されることになったのである。

ここで前者、明治十七年版『基督教聖歌集』の協力者についても、少しく言っておこう。先にも触れたように、同書の編纂には「デヴィス主任となり、アメルマン J. L. Amerman、岩野泡鳴、永井（松本）榮子らが助手として」（『日本の讚美歌』働いたという。アメルマンは当年、デビソンと同じ年の四十二歳。改革教会の牧師・神学者で、東京一致神学校（現、明治学院）の教授だったから、東京在任のはずである。このひとがデビソンの助手だったとは、どうも考えにくい。何かの誤伝ではなからうか。

次の岩野泡鳴の助手説は、かれが当年十二歳であることから、まったく成り立たない。明治十七年は、かれが小学校を出た年で、かれのキリスト教との接触は同二十年以後のこと。この誤伝は、T・M・マクネア著『讚美歌物語』（大正六年）に付載された「日本の讚美歌について」（別所梅之助執筆）の記事あたりを發生源とするものらしい。そこには十七年版編纂の折に、「岩野泡鳴氏が助手として尽され、松本榮子なども助勢せられたやうに承つてをります」とある。以後、この誤伝は広く流布して、今日に至っている。

泡鳴が関与したのは、実は改正増補版らしい。泡鳴は大阪の泰西学院、東京の明治学院、仙台の東北学院など、諸ミッションスクールを転々としたあげく、明治二十七年（二十二歳）の時点で、築地の歌舞伎新報社に勤務していた。そして、デビソンのもとに出入りするよう

になったという。けれども、それは関与というほどのことではなかったであろう。

要するに上来、纏説したように、十七年版・改正増補版はともにもっぱら、デビソン・栄子のコンビによる尽力の所産だったのである。

紙幅の余裕がないので、最後に栄子の作品(翻訳・創作)を一瞥しておく。

海老名一雄「多い子女史と日本の讚美歌」は、ポピュラーな栄子の作品として、十三篇を紹介している。ただし、そのうちの一篇は明治七年以来のバラ・本多庸一共訳のものゆえ、除かれねばならない。それ以外の十二篇はよく精選されたもので、まずそれらを列挙し、その上でさらに話をすすめることにしたい。(初めに引用するのは、十七年版の作品の歌いだしである。ただ3のみは、改正増補版に初出のもの。次に引用するのは、現行の昭和二十九年版『讚美歌』所収歌の歌いだしである。ただこれも3のみは、いま伝わっていないので、昭和六年版『讚美歌』所収のものを示す)。

1 「ひのもとなる このみくにを」↓「わがやまとの くにをまもり」

2 「はなのつゆと まさぎより」↓「ささやかなる しずくすら」

3 「ゆかしきまさごよ いざわれにかたれ」↓「ゆかしきまさごよ」

よ いざかたれかし」

4 「あまつさかえなる たみよよろこべ」↓「あめには御使ごつかい 喜び

うたえ」

5 「われよにあるうち なしゝわざの」↓「われ世にあるまに なせるわざを」

6 「あゝかゞやくシオンのあさけ 貴きみちのみひかり」↓「ああうるわしきシオンのあさ ひかりぞ照りそめける」

7 「あまつましみづ ながれて」↓「あまつましみづ ながれて」

8 「イエスよこゝろにやどりて われをみやとなしたまへ」↓「イエスよ、こゝろに宿りて われを宮となしたまえ」

9 「いともいそしめ みちのともよ」↓「つとめいそしめ 花のうえの」

10 「うきよのなげきも こゝろにとめじ」↓「うき世の嘆きも 心にとめじ」

11 「はるかにあふぎみる かがやきのみくに」↓「はるかにあおぎ見る かがやきのみくに」

12 「はるのあさけ なつのまひる」↓「はるのあした なつのまひる」

これらは過去一世紀の間、信者たちによって歌いつがれてきた懐しい作品群である。いまでも日ごと、公的・私的に愛唱されているにちがいない。しかも、これらが明治初期、うら若い少女によって製作されたものであるということは、劇的ともいえよう。

これらのうち、創作は1(「ひのもとなる……」)と7(「あまつましみづ……」)で、それ以外は翻訳である。以下、創作の二篇を現行のものと同対比しながら、考察してみたい。それぞれの引用は、上段が明治十七年版『基督教聖歌集』初出のもの、下段が現行『讚美歌』(昭和二十九年)に伝わっているもので、ともに全文。ちなみに現行の『讚美歌』は、明治三十六年版以来の各派共通讚美歌集で、昭和六年の改訂版を、戦後さらに大改訂したものである。——最初に、栄子の代表作

として知られる7（「あまつましみづ……」）を取り上げる。

- | | |
|---|------------------------------------|
| 一あまつましみづ
よにもわれにも
ながくかはける
よのみづいかで | ながれきて
あふれけり
わがたまに
たりぬべき |
| 二あまつましみづ
わがたまはまた
きみのめぐみは
つきぬいづみと | かほかざれ
われにこそ
わきいづれ
貴ときかな |
| 三あまつましみづ
たゆるせもなく
そのましみづを
くみてたのしく | かぎりなし
いぢよも
われはのまん |
| 一あまつましみづ
あまねく世をぞ
ながくかわし
くみていのちに | ながれきて
うるおせる
わがたましいも
かえりけり |
| 二あまつましみづ
かわきを知らぬ
つきぬめぐみは
いずみとなりて | 飲むままに
身となりぬ
こころのうちに
湧きあふる |
| 三あまつましみづ
つみに枯れたる
さかえの花は
そそげいのちの | うけずして
ひとくさの
いかに咲くべき
ましみづを |

上段は明治十七年版『基督教聖歌集』の一五〇番。「祈禱讚美」章の中にあつて、「永遠恵水」という題をもつ。この歌は、キリストとマリヤの水汲み女との問答を中心とするヨハネ伝四章の話を踏まえたものであらう。「我あたる水を飲者は永遠かく事なし且わが予ふる水は其中にて泉となり湧出て永生に至るべし」（明治十五年版『新約聖書』）というキリストのことばにめざめた女の思いに重ねて、作者は信仰告白をしている。そのさわやかな陳述の切れ味が、原作の見どころであらう。

下段は現行讚美歌の二一七番。これはふしぎなことに、「伝道」章中に収まっている。なるほど最後の第三節は、伝道の意志表示ともとれるが、「そそげいのちの ましみづを」は、そもそも自戒のはずであり、伝道の志向ではなからう。原作がこうした形に改作されるのは、明治三十六年版『讚美歌』においてであるが、そこでは「贖罪」章中

に収まっていた。伝道の歌とされるのは、昭和六年版からである。〈伝道〉はキリストの側の問題であつて、この歌のそもそのモチーフは、それを受ける側の〈讃仰〉にあつた。その双方を混在させるような措置が、どうしてとられたのだらう。

ありていにいえば、栄子の原作は、抒情詩であり、文学であつた。そこから主観性を排除し、作品に公共性・普遍性を付与しようといじりまわしているうちに陥穽にはまつた、とでもみるほかない。

この歌の曲譜の作者は、J・H・マクノーントン（一八二九—一九〇一）とされるが、このひとは経歴がわからず、国籍まで不明らしい。讚美歌委員会編『讚美歌略解・後編』（昭和三十年）によれば、この曲は「明治時代に米国宣教師が日本伝道用に持参した伝道用福音唱歌であり、その作曲者はおそらく無名の米国人と推定される。曲は唱歌調であり、大した芸術的価値もないが、わが国では明治時代からひろく親しまれてきた」という。（この曲の付いている讚美歌としては、ほかに例の結婚式の「いもせをちぎる……」がある。「福音唱歌」というのは、黒人霊歌とキャンプ・ミーティング・ソングの流れを汲む大衆伝道用のもので、十九世紀後半のアメリカで多産された。そのたぐいの親しみやすい調べと、内容の清純さによつて、「あまつましみづ……」はとくに女性に好まれてきたが、いまは立往生の悲運に見舞われているわけである。なお、この曲には「大した芸術的価値もない」とする大上段な言い分にも、わたしは疑問符を呈しておく。

一ひのもとなる このみくにを
かへりみ なみかぜなく
いとやすらに まもりたまへ
わがかみ

一わがやまとの 国をまもり、
あらぶる 国をしずめ、
代々やすけく おさめたまえ、
わが神。

二このみくにを よよにたかく
 たたせて きよきすがた
 よものうみに うつしたまへ
 わがかみ
 三あめつちをも しらしめせる
 わがかみ みちからもて
 なほみくにを まもりたまへ
 よよまで

二わが愛する 国をめぐみ、
 にこれる 波たたせて、
 とこしなえに きよめたまえ、
 わがかみ。
 三わが日の本 ひかりをそえ、
 みこころ おこなわれて、
 主のみくにと ならせたまえ、
 わがかみ。

上段は明治十七年版『基督教聖歌集』の四一八番で、下段は現行『讚美歌』の四一五番。前者は「国歌」章中であって、「国歌」という題をもぎ、「国福を祈る」という副題が添えられている。後者は「母国」章中であって、他のものと同じように無題。

この二つとも問題なのは、後者の作詞者を「Takayoshi Matsuyama」としていることである。讚美歌委員会編『讚美歌略解・前編』（昭和二十九年）は、これを松山高吉の創作とする前提に立って、まず「国祭日その他の国家の行事に日本の教会で最もよく歌われる歌である」と述べ、以下、次のように解説している。

これはオルテン編曲の Hinonoto に合せて、彼（松山高吉）が作ったもので、『新撰讚美歌』1888に初めて発表された。単純平明な愛国の歌であり、曲もうたいやすいところから、大いに用いられ、大正十三年、皇后陛下が同志社女学校をたずねられた時にも、第二次大戦後、天皇陛下が神戸女学院においてになった時にも、生徒一同によってうたわれ、両陛下を感激せしめたという逸話が伝えられている。今回、古風な用語が改められた。

が、この歌は明治二十一年（一八八八）刊行の『新撰讚美歌』に、松山高吉によって「初めて発表された」のではなく、それ以前の十七年

版『基督教聖歌集』に、松本栄子によって初めて発表されたのである。しかも彼女は、これを創作とせず、「God bless our native land」に始まる原歌の翻案として発表している。試みに明治三十八年にニューヨークで刊行された『The Methodist Hymnal』を当たってみると、その原歌はC・T・ブルックス（一八一三〜一八八三）、J・S・ドゥワイト（一八一二〜一八九三）両者による合作の、次のようなものである。

- 1 God Bless our native land!
 Firm may she ever stand,
 Through storm and night:
 When the wild tempests rave,
 Ruler of wind and wave,
 Do thou our country save
 By thy great might!
- 2 For her our prayer shall rise
 To God, above the skies;
 On him we wait:
 Thou who art ever nigh,
 Guarding with watchful eye,
 To thee aloud we cry
 God save the state!

遺稿集『永井多子詩文』には、栄子の短歌・新体詩・唱歌等を集

めた「大和なでしこ」一巻が収録されていて、その中に「国歌」と題する次のような作品が見られる。

日本なる この神国を 眷顧み 波風なく いと安穩らに 護り
給へ わが神

この神国を 代々に高く 立たせて 清き姿 四面の海に 映し
給へ わが神

表題の「国歌」には「譜アメリカ」と注記されているので、彼女はH・キャレイ（一六八五—一七四三）の曲に合わせながら、二節から成る単純な原歌を換骨奪胎して、同じく二節から成るこの莊重な翻案をまずまとめ、次いで第三節を添えて『基督教聖歌集』に収めた、というのが実際であろう。それは翻案とはいえ、ほぼ創作に近いものであった。彼女のそのような原作は、愛国の情感に満ちている上に、「……たまへ わがかみ（よよまで）」の連接が、何ともさわやかである。『新撰讚美歌』の編輯委員のひとり、松山高吉がそれに手を加えて、現行のもの母型となる改作を仕立てたのだが、それはやはり合理化の所産で、栄子の原作の鮮度と迫力が薄められていることはいなめない。その程度は、現行のものではいっそうひどくなっているのである。

海老沢一雄は、この栄子の原作をめぐる、

之れは女史の創作にかかると、(中略)「アメリカ」の曲譜を以て唱はれた。然るに現行「さんびか」に於ては之に対してオルチン氏作の新曲譜が与へられ、同時に歌詞も幾分改訂された。

〔あゝ子女史と日本の讚美歌〕

とされている。ここでいう現行「さんびか」とは、明治三十六年

版の各派共通『讚美歌』のこと。が、そうした改変は同書でされたのではなく、ずっと以前の『新撰讚美歌』でされていたわけで、曲も同書の編輯委員(音楽担当)の、オルチンのもの(HINOMOTO)と差し替えられた。この新曲については『讚美歌略解・後編』(前出)は、は、HINOMOTOは、オルチンが多分米国の曲から一八八九年に編曲したもので、(中略)ひろく日本人に愛唱されてきた曲である。しかし、祖国愛に満ちて神に祈る歌としては力強さが足りない憾みがある」と解説している。

「力強さが足りない」は、しかし曲ではなくて、松山が改めた歌詞なのではないか。あえていうなら、そこには強く祝詞調が揺曳しているように思える。それはおそらく、松山の出自が平田鉄胤門で、かれが神道への嗜好を終生もちつづけたという経歴と関わるものである。一方、栄子の原作には、これもあえていうと、藤田東湖の長詩「正気歌」の投影が認められる。彼女は父親を介して、水戸学にも薫染していたらしい。その長詩を書いた、八歳の折の雄渾な筆跡が遺稿集に紹介されている。彼女はその掛軸を、最後まで手離さなかったという。

前掲の海老名文章は昭和三年、アメリカでしるされている。したがって、日本の事情に疎いものになっているのは無理もない。それにして、亡き栄子を記念するために、この愛国の聖歌は「女史の創作」とかれが誇らかにしるす時点の日本では、それは「松山高吉の創作」でしかなかったというの痛ましい。果たして、そのあと三年して完成した昭和六年版『讚美歌』において、それにはすべりきり「Takayoshi Matsuyama」の銘が打たれていた。そのとき、松山はまだ在世していた。(従来、日本人の創作歌にはすべて「Original」とのみしるすが慣わしであったが、この昭和六年版からは、それに

も氏名を明記することになったのである。

明治二十一・二十三年版『新撰讚美歌』↓同三十六年版『讚美歌』
↓昭和六年版『讚美歌』↓同二十九年版『讚美歌』という流れをたど
って、各派共通を建て前とする日本の讚美歌は発展し、今日に至った。
栄子が総力を傾けて関与した明治十七・二十八年版『基督教聖歌集』
は、その過程で見る間に、あえなく雲散霧消する。

その最後を見届けるかのようにして明治三十五年、栄子は单身、格
別な目的もなく渡米する。この日本脱出には、多岐な原因が絡んだら
しいとはいえ、その主軸はやはり讚美歌問題であったと思う。

そして在米、二十七年。再び母国の土を踏むことのなかった彼女は、
日本の讚美歌史の上からも、ひいては日本の近代詩史の上からも、つ
いに抹殺される結果になった。彼女の「遺言」の末尾には、「私の遺
灰を大洋の中に撒布せよ。ある暖き春の日に」という添え書きがされ
てあった。そのメッセージを耳にしながら、わたしはなおしばらくは
彼女にこだわりつづけることになりそうである。